

## (六) 亡弟子智泉が爲の達嚙の文

空海がこの文で「入道の長子」(最初の弟子)と言い、ずっと身近に置いて育てた弟子智泉は、出自が讃岐の菅原氏あるいは阿刀氏で、母は空海の姉と言われている。

その生没年は不詳で、一般に延暦八年(七八九)二月十四日(天長二年(八二五)二月十四日)と言われている。延暦十六年(七九七)、九才の時、空海に伴われて大安寺の勤操に入室。十四才で空海の従者になったとされる。同二十三年、十六才で受戒したと伝えられるが、当時具足戒受戒は二十才からで、事実関係は不明である。しかし同年、空海の侍者として第十六次遣唐使船に乗り、大同元年(八〇六)空海とともに帰国して筑紫の観世音寺に留まった。大同四年(八〇九)空海に随って入京し高雄山寺に入り、やがてその三綱となったという。空海の高野山開創には最初から手足となってかわり、のちに東南院を住坊とし、そこで遷化した。

空海にとつては甥にあたり、侍者として公私ともに身近にあつた智泉だけに、その早逝に空海は相当悲しんだらしく、その心情が伝わってくる。

●本文…夫 寥廓性虚 離諸因而凝然 飄蕩染海 隨衆緣以起滅 故能 一念妄風  
鼓波濤心壑 十二因縁 化生死迷夢 識幻構三有獄 色焰逸六趣野 遂使 无明羅  
刹 斫龜鶴之命 異滅旃陀 殺蜉蝣之體 乍無乍有 既如浮雲 忽顯忽隱 還似泡  
沫 苦樂天獄之縣 憂喜人畜之落 可嘆可嘆 幻化子 悠哉悠哉 乾城客

書き下し…夫れ、寥廓たる性虚は諸因を離れて凝然たり。飄蕩たる染海は衆縁に随い

以て起滅す。故に、能く一念の妄風は波濤を心壑に鼓ち、十二因縁は生死を迷夢に化す。

識幻は三有の獄に構え、色焰六趣の野に逸なり。遂いに无明の羅刹をして龜鶴の命を斫

り、異滅の旃陀は蜉蝣の體を殺す。乍に無く乍に有る、既に浮雲の如し。忽に顯わ

れ忽に隱る、還つて泡沫に似たり。天獄の縣に苦樂し、人畜の落到憂喜す。嘆くべし嘆

くべし、幻化の子。悠かなる哉、悠かなる哉、乾城の客。

私訳…そもそも、廣大無辺の法性の虚空はあらゆる因と縁を離れてじっと動かない。波がうねって揺れ動く煩惱の海は多くの因縁に随つて以て生滅をくり返す。故に、能く妄念

のひと吹き風の風は波濤（意識・末那識）を起しその音を心壑（蔵識、アーラヤ識）に打ち鳴らし、十二因縁は生死（迷妄の世界）を真実の世界だと錯覚（迷夢）させてしまう。識（能変、アーラヤ識・末那識・意識）と幻（所変、一切法）は欲界・色界・無色界という牢獄で転変し、色焰（意識・末那識の対象界、一切法）は六道輪廻の世界で気ままである。かくして、無明（生命欲）という悪鬼（人を食う悪鬼）に亀や鶴の命（長寿）を削らせ、変幻・生滅をくり返し無常を知らない最下層の民（凡夫）はトンボ（俗世のはかなさ）の身体を殺す。（俗世の欲というものは）すぐに無くなったり有ったりして浮雲のようであり、すぐに頭わかれては消えるのも水の泡に似ている。天国から地獄までの心域で苦樂し、人間と畜生の集落で憂喜する。歎きなさい、歎きなさい。幻のような変幻の世界に生きる子供（凡夫）よ。はるかなるかな、はるかなるかな。蜃気楼（幻の一つ）に迷う旅人（凡夫）よ。

※註記1…寥廓は、広々として大きいこと。

※註記2…性虚は、法性の虚空。

※註記3…凝然は、じっとして動かないこと、不動。

※註記4…飄蕩は、波にもまれて漂うこと。揺れ動くこと、さまようこと。

※註記5…染海は、煩惱の海。

※註記6…妄風は、迷妄の風。

※註記7..波濤は、迷妄の波。第六識（意識）と第七識（末那識）の喩え（『三教指歸 性靈集』岩波書店）。

※註記8..心壑は、心の奥の谷。第八識（藏識、アーラヤ識）の喩え（『三教指歸 性靈集』岩波書店）。

※註記9..鼓は、煽る。叩く、奮い立たせる、の意。

※註記10..識幻は、識が唯識で言う能変、幻が所変。

※註記11..三有は、欲界・色界・無色界の三界。

※註記12..色焰は、意識・末那識の対象界。

※註記13..六趣は、六道輪廻。

※註記14..无明は、無明。生命欲。眞実の世界を知らない煩惱のレベル。

※註記15..羅刹は、悪鬼。

※註記16..異滅は、生・住・異・滅（四相）の異・滅。異は変幻・衰退。

※註記17..旃陀は、チャンドーラ。不可触浅眠。ここでは凡夫、の意。

※註記18..蜉蝣は、かげろう。

※註記19..天獄は、天国から地獄までの輪廻の世界。

※註記20..幻化の子は、幻のような変幻の世界に生きる凡夫。

※註記21..乾城は、乾闥婆城。蜃気楼のこと。

●本文・爰 覺王垂悲 接誘群迷 智臣騎忍 汲引衆慙 廣投教網 漉沈淪之魚  
高張法羅 罩飛散之鳥 幸以智惠之刀 煮以一味之鼎 三點四德之客 日夜  
盤樂 不二一如之主 歲時无爲 无爲之爲 誰敢思議之矣 念亡我法化

書き下し・爰に、覺王は悲を垂れて群迷を接誘し、智臣は忍に騎つて衆慙を汲引す。廣  
く教網を投げて沈淪の魚を漉き、高く法羅を張つて飛散の鳥を罩める。幸どるに智惠

の刀を以てし、煮るに一味の鼎を以てす。三點四德の客、日夜に盤樂し、不二一如の主、

歳時に爲すこと無し。无爲の爲、誰か敢えて之を思議せんや。

私訳…ここに、覺王（大日如来）は、慈悲を示し凡夫に接してサトリの世界に導き入れ、  
智慧のすぐれた臣下（菩薩）は、忍辱波羅蜜（耐え忍ぶ行い）によつて迷える衆生（凡  
夫）を仏道に引き入れる。（それは）広く密法の網を投げて水に深く沈んでいる魚をす  
くい上げ、高く仏法の網を張つて飛び散る鳥を捕獲し、（それらを）サトリの智慧の刀  
で料理（化導）し、（三本足（＝三乗）の形ながら一つの器として密法一乗を象徴する  
鼎で煮るのである。（すると）法身・般若・解脱の三徳や常・樂・我・淨の四徳という  
涅槃の世界にいる如来は、日夜腰に根が生えたように動かず、如来と衆生とが不二平等

の境界にある大日如来も、春夏秋冬やることがない（ようである）。この無為の為、誰が敢えて思いをめぐらせ考えにふけるだろうか。

※註記 1 .. 覺王は、大日如来。

※註記 2 .. 垂は、示すこと、模範・教えを示すこと。

※註記 3 .. 群迷は、凡夫。

※註記 4 .. 接誘は、サトリの世界に導き入れること。

※註記 5 .. 智臣は、智慧のすぐれた臣下・弟子。覺王の臣下⇨菩薩。

※註記 6 .. 忍は、忍辱、六波羅蜜の一つ。

※註記 7 .. 衆慙は、迷える衆生（凡夫）。

※註記 8 .. 沈淪は、水に深く沈んでいる、俗世に迷える（凡夫）、の意。

※註記 9 .. 法羅は、仏法の網。

※註記 10 .. 宰は、料理すること。

※註記 11 .. 一味は、一乘⇨密教。

※註記 12 .. 鼎は、三本足⇨三乗の形ながら、一つの器として密法一乗を象徴する。

※註記 13 .. 三點は、涅槃の内容である法身・般若・解脱の三徳。これを悉曇で三點（転）

とする。例えば、「イ」字は三つの点で一字となり、三點は不離の意も表す。

※註記 14 .. 四徳は、涅槃の四徳⇨常・楽・我・淨。

※註記15…客は、如来『三教指歸 性靈集』岩波書店）。

※註記16…主は、大日如来。

※註記17…盤樂は、腰に根が生えたように動かないこと。

※註記18…歳時は、四季、四季折々、一年。

●本文…念亡我法化 金剛子智泉 俗家謂我舅 入道則長子 孝心事吾 二紀于今矣  
恭敬稟法 兩部无遺 口密无非 豈唯嗣宗之不言 怒也不移 誰論顔子之不貳 斗  
藪與同和 王宮與山巖 影隨不離 股肱相從 吾飢汝亦飢 吾樂汝亦樂 所謂 孔  
門回愚 釋家慶賢 汝即當之 所冀 轉百年之遺輪 驚三密於長夜 豈圖 請棺擲  
乎吾車 感有慟乎吾懷 哀哉哀哉 哀中之哀 悲哉悲哉 悲中之悲 雖云覺朝无夢  
虎 悟日莫幻象 然猶 夢夜之別 不忍不覺之淚 巨壑半渡 片楫忽折 大虚未凌  
一翎乍摧 哀哉哀哉 復哀哉 悲哉悲哉 重悲哉

書き下し…念<sup>おも</sup>うに、亡き我が法化<sup>ほうけ</sup>、金剛の子智泉は、俗家に我を舅と謂う。入道して則ち長子<sup>ちやうし</sup>  
たり。孝心ありて吾に事うることに今に二紀。恭敬して法を稟<sup>う</sup>け兩部<sup>のふ</sup>遺ること無し。口密  
に非<sup>あ</sup>無く、豈<sup>あ</sup>唯<sup>あ</sup>だ嗣宗<sup>しそ</sup>の不言ならんや、怒りや移さず、誰か顔子<sup>がんし</sup>の不<sup>ふ</sup>貳<sup>ふたたびせ</sup>ざるを論ぜん。

斗藪とそうと同和と、王宮わんぐうと山巖さんがんと、影となつて随こころい離れず。股肱ここうとなつて相従う。吾飢れば

汝亦た飢え、吾樂しめば汝亦た樂しむ。所謂いわゆる孔門こうもんの回愚かいぐ、釋家の慶賢きやうけん 汝即ち之に當る。

冀ねがう所は、百年の遺輪ゆいりんを轉じ、三密を長夜じやうやに驚かせることなり。豈あにはか圖らんや、棺槨かんかくを吾

が車に請うて、働なげ有るを吾が懷おもひに感ぜしめんと。哀れなる哉、哀れなる哉、哀れのな

かの哀なり。悲しい哉、悲しい哉。悲しさのなかの悲しさなり。覺さとりの朝に夢虎むこ無く、

悟りの日に幻象げんざう莫しと云うと雖も、然れども猶なお、夢夜ぼうやの別れ、不忍不覺の涙、巨壑きよかくを半

ば渡るに片楸へんしゆう忽ちに折れ、大虚だいこを未だ凌がざるに一翎れい乍ちに摧く。哀れなる哉、哀れな

る哉。復た哀れなる哉。悲しい哉、悲しい哉。重ねて悲しい哉。

私訳・思うに、今は亡きわが弟子、密教の仏子智泉は、俗世の關係では私が叔父に當る。

仏門に入つて私の初めての弟子となつた。真心をもつて私に仕えること二十四年、謹み敬つて密法を受法し、金胎兩部の大法を遺漏なく受持した。その言葉や意味するところ



に非がなく、阮嗣宗（阮籍）が他人の批評は控え口にしなかつた故事は言うまでもなく、怒りは他人を傷つけたりせず、過ちは二度とくり返さない顔回（孔子の弟子）の故事を論ずるまでもない。修行でも住坊での同居でも、皇居でも山林でも、影となって随順して離れず、手足となつて補佐した。私が飢えればお前もまた飢え、私が樂しめばお前もまた樂しんだ。いわゆる孔子の門弟の「顔回愚かならず」や、釈尊の弟子のうち二十年も仕えた阿難は、これにお前は相当する。（そのお前に願いたいのは）長い歲月釈尊が遺した教えを広め、密法によつて煩惱から目覚めず長い夜眠っている凡夫を驚かすことである。よもや、顔回の死の際の故事のように、私の車をひつぎにしたいと願うことや、（孔子とおなじように）弟子への想いに歎きをさらに感じさせれることにならうとは。哀れなるかな、哀れなるかな、哀れのなかのさらなる哀れである。悲しいかな、悲しいかな。悲しさのなかのさらなる悲しさである。覺つた朝に夢で見た虎はなく、悟つた日中に幻の象はないと言われるが、そえでもなお、夢のなかでの別れ、忍びがたき不覺の涙は、大波の海を半ば渡つたところでたちまち一本の舵が折れ、大空を飛び終わらないうちに鳥の羽が一つ碎けてしまった。哀れなるかな、哀れなるかな。さらに、哀れなるかな。悲しいかな、悲しいかな。重ねて悲しいかな。

※註記 1…法化は、弟子。

※註記 2…金剛子は、金剛乘（密教）の仏子。

※註記3・・長子は、長男。初めての弟子。

※註記4・・紀は、十二年。

※註記5・・嗣宗は、阮嗣宗。「竹林の七賢」の一人で三国時代の魏の思想家の阮籍。立身出世の道を捨て、反世間的・反権力的な酒・奇行・清談を専らとし、老荘・神仙を説き他人の批評を避けた。

※註記6・・顔子は、孔子の弟子の顔回。

※註記7・・貳は、(二度も)くり返すこと。

※註記8・・斗藪は、身を清浄にして修行すること。

※註記9・・同和は、住坊にあつて同居和合すること。

※註記11・・股肱は、もも・ひじ。転じて、主君の手足となつて補佐すること。

※註記12・・孔門は、孔子の門弟。

※註記13・・回愚は、『論語』為政第二に「子曰わく吾回(顔回)と言う。終日違わざること愚なるが如し。退いて其の私を省みれば、亦た以つて発するに足る、や不愚かならず」、すなわち「私が顔回と一緒に話していても、彼は静かに聞いているだけで愚かからうだ。しかし、私の前を退いたあと、彼の私生活を観察してみると、私の教えを充分啓発している。顔回は愚かではない」とあり、不言実行の故事。

※註記14・・釋家は、釈尊の子弟。

※註記15・・慶賢は、阿難(『三教指歸 性靈集』岩波書店)。

※註記 16..遺輪は、釈尊が遺した法輪の教え。

※註記 17..長夜は、衆生（凡夫）の煩惱から目覚めない長い夜。

※註記 18..棺槨は、二重のひつぎ。棺は内棺、槨は外棺。『論語』先進第十一に「顔淵死す。顔路（顔回の父）、子（孔子）の車以て之が槨と為さんことを請う。子（孔子）曰く。才あるも才あらざるも、亦各々其の子を言うなり。鯉（長男）や死す、棺有りて槨無し。吾徒行して以て之が槨を為（つく）らざるは。吾が大夫の後に従うを以て、徒行するべからざるなり」とある。

※註記 19..働は、歎き。

※註記 20..巨壑は、大波、大海。六波羅蜜（『三教指歸 性靈集』岩波書店）。

※註記 21..片楫は、一本の舵。

※註記 22..大虚は、大虚空、大空。

※註記 23..一翎は、一枚の羽。

●本文..又夫 世諦事法 如來存而不毀 眞言祕印 汝已授而不謬 一字一畫 吞衆  
經而不飽 一誦一念 銷諸障以非難 證不生於一阿 得五智乎鑊水 法界三昧 汝  
久修習 遮那四祕 汝亦游泳 觀月鏡於心蓮 燒妄薪於智火 我則金剛 我則法界  
三等眞言加持故 五相成身 妙觀智力 卽身成佛 卽心曼荼 故經云 我覺本不生  
云々 又眞言曰 曩莫三曼多沒馱南 阿三迷底里三迷 三麼曳沙縛訶云々 如是

眞言 如是伽陀 示法體此身 表眞理此心 一聞則除四重一闡提 一誦則證三等四  
法身 汝久解此義 吾重爲汝說

書き下し…又夫れ、世諦せたいの事法じほう、如來の存して毀やぶらず、眞言の祕印、汝已に授かつて謬あやまらら

ず。一字一畫かくに衆經しゆきようを呑んで飽あかず、一誦一念は諸障を銷けして以て難しからず。不生を

一阿に證し五智を鑿水ばんすいに得たり。法界三昧を汝久しく修習し、遮那の四祕に汝また游泳

す。月鏡がつきようを心蓮しんれんに觀もうじ妄薪もうしんを智火ちかに燒く。我は則ち金剛、我は則ち法界。三等の眞言の

加持の故に五相成身ごそうじやうじんし、妙觀智力あつて卽身成佛す。卽ち心は曼荼なり。故に經に云わ

く、我覺本不生云々。又眞言に曰わく。曩莫三曼多没駄南 阿三迷底里三迷 三麼曳沙

縛訶云々と。是の如き眞言、是の如き伽陀がだ、法體ほつたいを此の身に示し、眞理を此の心に表わ

す。一たび聞けば則ち四重一闡提しじゆついちせんたいを除き、一たび誦すれば則ち三等四法身さんとうしほつしんを證す。汝久しく此の義を解す。吾重ねて汝の爲に説く。

私訳…また、そもそも、世俗の理法である生滅流転をくり返す諸行無常の道理を、（世俗の生・老・病・死を越えて不死であるはずの）如来さえこの世に存在して破らず、真言門の秘印をお前はすでに受持して誤ることがない。一つの文字一つの字画に多くの密典が含まれること充分であり、一つの口誦一つの観想は諸々の障礙を消すこと難しからず。阿字の一字に本不生の理法を覺り、五智をバン字大悲の水に得ている。法界定印を結ぶ胎藏界念誦法をお前は長い間くり返し行い、また『金剛頂經』の所説に等しい大・三・法・羯の四種智印の修習もお前は怠らなかつた。本有菩提心を清浄な心に觀想し、迷妄の薪をサトリの智慧の火で焼く。私は金剛身であり、私は法界であり、この私と金剛身と法界の一体平等を象徴する真言の加持によって、通達菩提心・修菩提心・成金剛心・証金剛身・仏身円満の「五相成身」を成就し、妙觀察智の力によって即身成仏し、心は曼荼羅となつた。だから、ある密典に「我覺本不生」云々と言ひ、また眞言には「のうまく さまんだぼだなん あさんめいちりさんめい さんまえい そわか」云々と言う。このような眞言、このような偈文は、法界体性であることをこの身に示し（即身）、（法性という）真理をこの心に表わしている。これをひとたび聞けば、四悪趣の重罪や極欲を除き、ひとたび誦すれば三平等や四種法身を覺る。お前は長い間こうした密教の奥義を理解してきた。私はそのことを重ねてお前のために説いたのである。

※註記1…世諦は、ここでは世俗の理法。龍樹はじめ大乘中觀派が言う「世俗諦」を直接

意味してはいない。

※註記2…事法は、生滅流転をくり返す諸行無常の道理。

※註記3…祕印は、手印、印相。

※註記4…不生は、阿字本不生。

※註記5…一阿は、阿字一字。

※註記6…五智は、金剛界五如来の智慧。法界体性智（大日）・大円鏡智（阿閼）・平等

性智（宝生）・妙觀察智（阿弥陀）・成所作智（不空成就）

※註記7…鍍水は、毘盧遮那バン字大悲の水。

※註記8…法界三昧は、法界定印を結印する胎藏界念誦法。

※註記9…四祕は、四種智印。金剛界の大智印・三昧耶智印・法智印・羯磨智印。大師の

『金剛頂経開題』は、『金剛頂経』の経題『金剛頂一切如来真实撰大乘现証大教王経』を「如来||大智印」「金剛||三昧耶智印」「真实||法智印」「大教王||羯磨智印」とし、経題の各々が各印の要義を撰し尽くすとしている。すなわち大師は、『金剛頂経』の所説を四智印で代替する。ここは、「すなわち、（真理の場たる）その曼荼羅に入つて、即身に成仏の境地に到達せんとする密教徒がへ一尊瑜伽の行法（身にその尊の羯磨印を結び、口にその法印を発音し、意にその三昧耶印を念想し、かくて自らの一身をその尊のシンボル、即ち大印と化し、シンボライズされるものとシンボルそれ自体は同一である、という『金剛頂経』の瑜伽の論理によつてその特定の一尊と自己との瑜伽を実現

せんとする行法) によってその尊と自らとを同一化すべき尊格、として変現して三昧耶曼荼羅を形成するのである」(『反密教学』津田真一) に留意しておきたい。

※註記10..月鏡は、満月||本有菩提心。

※註記11..心蓮は、本来清浄な心。

※註記12..妄薪は、迷妄(煩惱)の薪。

※註記13..智火は、サトリの智慧の火。

※註記14..金剛は、金剛身。

※註記15..三等は、三平等。三平等には身(印)・口(真言)・意(観想)とか我身・仏身・衆生身などいくつかの意味があるが、ここはあとに続く「真言加持」と「五相成身」を考慮し、我・金剛身・法界(金剛界如来、一切の如来)の不二平等ととる。

※註記16..眞言は、「五相成身」の五相各々の眞言。これを、胎蔵界入仏三昧耶眞言の「三平等(チリサンマエイ)」とする説がある(『三教指歸 性靈集』岩波書店)が、その場合「三平等」の「三」に身・口・意などの諸説がある。

※註記17..五相成身は、『金剛頂経』の名場面で、一切義成就菩薩(||シッダールタ|| 釈尊)がサトリに至った最終過程を(自性成就の)眞言によって代替する。すなわち、通達菩提心・修菩提心・成金剛心・証金剛身・仏身円満の眞言。

※註記18..妙観智力は、妙観察智(五智の一つ)の力。

※註記19..即身成佛は、ここは「五相成身」の仏身円満。

※註記200…経曰「我覺本不生云々」は、『大日経疏』具緣品。

※註記210…「曩莫三曼多没駄南」は、胎藏界の入仏三昧耶真言。

※註記220…伽陀は、短い句、ガータ、偈頌・偈文。ここは「我覺本不生云々」のこと。

※註記230…法體は、法界体性としての身体、法身。

※註記240…此身は、この身、生身、肉身。

※註記250…四重は、四悪趣（地獄・餓鬼・畜生・修羅）の重罪。

※註記260…一闍提は、一闍底迦。極欲、信不具足、断善根。成仏の要件を持たない者。

※註記270…三等は、前述。三平等について、『三教指歸 性靈集』（岩波書店）は説明

が一貫しない。

※註記280…四法身は、四種法身。自性身・受用身・變化身・等流身。

●本文…仰願 金剛海會 卅七尊 大悲胎藏 四種曼荼羅 入我我入加持故 六大无

碍瑜伽故 與塵數眷属 无來而來 將海滴分身 不攝而攝 開五智本有殿 授九尊

性蓮宮 都法界以稱帝 遍刹塵而撫民 有情所攝 無明所持 同悟此理 速證自大

覺

書き下し…仰ぎ願わくは、金剛海會かいえの卅七尊、大悲胎藏ししゆの四種曼荼羅、入我我入にゆうがにゆうの加持の



故に、六大は無碍にして瑜伽なるが故に、塵數の眷屬とともに无來にして來たり、海滴の分身とともに不攝にして攝せん。五智本有の殿を開き、九尊性蓮の宮を授けん。法界を都とし以て帝を稱え、刹塵に遍して民を撫でん。有情の攝する所、無明の持する所、

同じく此の理を悟り、速かに自ら大覺を證せん。

私訳・仰ぎ見て願うに、金剛界曼荼羅の三十七尊、胎藏生曼荼羅の大・三・法・羯の四種の曼荼羅、それらの諸尊との入我我入（相互装入して一体）の故に、六大（地・水・火・風・空・識）は障礙なく相互相入して一つになっているが故に、（諸尊は）数え切れぬほどの諸天善神とともに（不滅の滅と同じく）本有態としては无來なのであるが現象態として來たり、曼荼羅海会の大日如來の分身（|| 仏・菩薩）とともに本有態としては不摂（衆生濟度をしないの）であるが現象態としては摂（衆生濟度）することを。また、五智を本来有する（金剛界）五仏の世界を開き、胎藏生曼荼羅の中央にあつて五如來と四菩薩（九尊）が坐す本有としての八葉蓮台の世界を授けることを。また、法界を都として帝（大日如來）を稱え、国土の隅々まで遍く民衆を慈しむことを。そして、衆生を濟度するのも、無明を持ち続けるのも、同じくこの道理を悟り、すみやかに自らサトリ

を得んことを。

※註記1…金剛海會は、金剛界曼荼羅。

※註記2…卅七尊は、金剛界曼荼羅の三十七尊。

※註記3…大悲胎藏は、胎藏生曼荼羅。

※註記4…四種曼荼羅は、大曼荼羅(絵図)・三昧耶曼荼羅(イコン)・法曼荼羅(種字)・

羯磨曼荼羅(木像、鑄像、立体曼荼羅)。

※註記5…六大は、地・水・火・風・空・識。六大体大。

※註記6…无碍は、無礙、清淨。障礙がないこと、清淨なこと。

※註記7…瑜伽は、合一、相互相入して一つになること。

※註記8…塵數は、散りの数ほどの、無数の、数え切れないほどの、の意。

※註記9…眷属は、護法善神、諸天、天部の神々。

※註記10…海滴は、海は海会||曼荼羅。滴は海会の一滴||諸尊。

※註記11…分身は、大日如来の分身。

※註記12…九尊は、胎藏曼荼羅中央の八葉蓮台に配された五如来(大日・宝幢・開敷華

王・無量寿・天鼓雷音)と四菩薩(普賢・文殊・觀自在・弥勒)。『三教指歸 性靈集』

(岩波書店)の第九識、はいかがか。

※註記13…性蓮は、本有としての八葉蓮台。同じく、同書の「第九識の未開の蓮の体性」

もいかがか。

※註記 14 .. 刹塵は、刹は国土。国土の塵、塵の数ほど無数の国土、の意。  
※註記 15 .. 有情は、衆生、凡夫。